



芸術学

芸術を広く深く探求し
地域、社会、そして世界への貢献を目指す。

伝統工芸のまち、
金沢ならではの環境をいかした
「学び」と「研究」の場を提供します。
芸術をあらゆる視点から深め
多様な領域における専門的研究を可能にし
その成果を世の中に還元できる人材を育てます。

芸術の現代的意義を、グローバルスタンダードの学術研究と領域を超えた横断的なアートワークの実践により探求し社会をリードする

芸術学 ⇒ Sustainable Contemporary Art Practice and Visual Culture Studies (SCAPE)

21世紀の芸術の置かれた複雑多様な社会、経済、文化、環境の問題を理解し、持続可能な社会への希望を発信する実践と視覚文化研究のできる人材を育てます。

1年次

視覚文化史、文化産業学、文化人類学、コミュニティ社会学、科学技術論、市場経営学、持続可能経済学等を横断した現代批評構築や多言語コミュニケーションをスタディスキルの基本として導入します。並行して、市場の現在性に基づく、立体・平面・メディアアート等、多岐に渡る表現形式を媒体とする現代美術領域の実践的理論と創作の探究を行います。

芸術学演習(一) [グローバル美術理論1]

芸術学概論

彫刻・工芸・デザイン・映像メディアなどの実技



芸術学演習(一)

[グローバル美術理論1]

芸術学における研究・調査・議論・発表に必要なスタディスキルの基礎を身につけます。金沢のローカル文化を通してグローバルな視野で考えるための必要な現代批評と重要なポストコロニアル理論を日英語文献で多読し、工房見学などのフィールドワークも行いながら小型プロジェクトを達成します。



芸術学概論

-多形式表現制作の理論と実践-

現在の市場性と批評軸を調査し、表現を成立させる多様な社会の背景を理解します。独自性のあるイメージを顕現出来るうる自己の基盤を作ります。以上をバックボーンとして、整合性のある作品とコンセプトで表現の強度を上げていくことを目的とします。

2年次

1年次の学際的かつ横断的なアプローチによる研究・制作導入に引き続き、ポストコロニアル理論と視覚文化の問題の理解を深める一方、制作プロジェクトを通して多形式を前提とした現代の美術市場傾向を鑑みた「実践」を行います。

芸術学演習(二) [グローバル美術理論2]

芸術学特論

絵画・版画・工芸・美術表現などの実技

芸術学演習(二)

[グローバル美術理論2]

ポストコロニアル理論と文化社会(知の不均衡の力学、国家と人種、表象、ジェンダー、西洋一東洋、東アジアの植民地問題と脱植民、サステナビリティ等)などの批評の視点と方法論を日英語文献の多読を通して学び、議論することで現代の文化社会とアートの問題を考えます。

教育の特色①

自分=社会の意識を強め、グローバル社会に説得力のある多言語と視覚表現を一体化して発信できる基本的なスタディスキルを養います。



芸術学特講

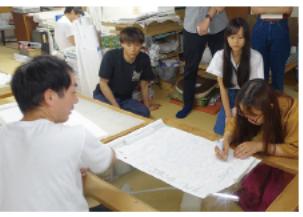
アートの価値評価が規定されていく重要な要素となってきた展覧会、芸術祭、アーカイヴとコレクションを通してどのような批評空間が形成され市場に反映されてきたのかを様々なケースについて実践の視点からの作品分析、文献講読、フィールドワークを行い、個別プロジェクトを達成します。また、制作分野では、形式を多岐にわたって表現形式として取り入れる現在の市場の流れと批評軸を踏まえ、表現を成立させる多様な社会の背景を理解した上で、自己の作品表現強度及び深度を上げます。美術市場についての造詣を深め、将来的に目指す職業について情報収集し、実践的な演習によって独自性を獲得することが目標となります。



佐藤莉於《巡り手》、
2020、写真・朱肉他
(『Covid-19 アートと
コミュニケーション』展参加)

学外活動の支援

美術館・ギャラリー・文化財修理工房などの見学も随時行います。また、金沢での展覧会の企画など、学生による自主的な学外活動を積極的に支援します。



毎田染工芸の見学(金沢市)

金沢芸術学研究会の開催と『芸術学 学報』の編集

学内外に開かれた金沢芸術学研究会は、年1回研究会を開催し、研究者に発表の場を提供しています。また修士論文の中から優秀なものを掲載した学術雑誌『芸術学 学報』を発行し、芸術学専攻内に事務局を置いています。



学外研修

本専攻の教員には、欧米の美術大学を卒業した者、長く教鞭を執っていた者、作家として海外で活動していた者など、現代の国際的な芸術事情に精通する教員で構成されています。生きたグローバルネットワークを活かし、希望に応じて海外研修等を企画する他、海外留学、アーティストインレジデンス、芸術祭参加などのキャリア形成の架け橋となります。

3年次

現代批評と実践の専門性を高め、各自の専門分野を確立します。近現代工芸/デザイン/視覚文化研究領域、現代美術領域ー多形式制作及び実践的理論、現代批評及びアートプロジェクト領域、絵画表現領域、美術史研究領域などからゼミを選び、指導を受け、作品制作、プロジェクト企画、展覧会キュレーション、研究論文発表などを行います。

芸術学演習(三)

専門演習

(近現代工芸/デザイン/視覚文化研究領域、現代美術領域ー多形式制作及び実践的理論、現代批評及びアートプロジェクト領域、絵画表現領域、美術史研究領域など)

絵画・コンピューターグラフィックスなどの実技

芸術学演習(三)

3年には、卒業論文の足がかりとなるよう、研究対象に応じたより専門的な演習を行います。また、各自が美術品を購入し、それについて多角的な調査・研究に従事する演習もあります。購入品は国内外の絵画、彫刻から工芸品まで、多種多様です。各自研究成果を口頭で発表し、レポートにまとめ、あわせて学内で購入品の展覧会を開催します。

ゼミの一例 ⇒ 現代美術領域ー多形式制作及び実践的理論 現在の市場性と批評軸を調査し、表現を成立させる多様な社会の背景を理解した上で、自己プロデューススキルを習得します。独自性のあるイメージを顕現出来うる自己の基盤を強化し、整合性のある作品とコンセプトで表現者としての深度を深めるとともに、企画展示やアーティストインレジデンスなどの野外学習などで現場力をつけ、即戦力として活動できる地盤を作ります。



卒業後の進路

愛知県陶磁資料館、石川県七尾美術館、石川県立能登島ガラス美術館、石川県立美術館、石川県輪島漆芸美術館、伊丹市美術館、うつのみや妖精ミュージアム、金沢21世紀美術館、金沢市立中村記念美術館、金沢湯涌夢二館、九州国立博物館、黒部市美術館、公益財団法人鍋島報效会 微古館、静岡市美術館、女子美術大学歴史資料展示室、福井市自然史博物館分館、福島県立博物館、敦賀市立博物館、東京国立博物館、東北福祉大学 芹沢銅介美術工芸館、富山県水墨美術館、富山市美術館、名古屋市美術館、福井県立博物館、福岡アジア美術館、古川美術館、碧南市藤井達吉現代美術館、北海道立近代美術館、北海道立釧路芸術館、ボーラ美術館、柳宗理記念デザイン研究所、横須賀市美術館、横浜美術館、和歌山県立美術館、ヴァンジ彫刻庭園美術館、リンクアート群歴史協会(アメリカ合衆国)、東京藝術大学、福井大学、和光大学、公立および私立中・高等学校美術教員など【他大学進学先】九州大学、京都市立芸術大学、群馬県立女子大学、慶應義塾大学、神戸大学、昭和女子大学、総合研究大学院大学、千葉大学、中京大学、筑波大学、東京学芸大学、東京大学、東北大大学、ニューヨーク大学、ブレーメン美術大学、ロンドン大学など

4年次

3年間に積み上げてきた表現研究、視覚文化研究、市場研究等をもとに確固とした研究意義のあるテーマを各自で選び卒業研究に取り組みます。多形式による作品制作またはアートプロジェクト企画などの実践と論文を組み合わせた研究を完成させ、成果は金沢21世紀美術館での卒業制作展で展示すると同時に公開講演を行います。

芸術学演習(四)

専門演習

(近現代工芸/デザイン/視覚文化研究領域、現代美術領域ー多形式制作及び実践的理論、現代批評及びアートプロジェクト領域、絵画表現領域、美術史研究領域など)

卒業研究[論文／制作]

芸術学演習(四)

各自が主体的に設定したテーマを担当の指導教員の個人チュートリアルを受けながら発展させ、卒業研究(論文／制作)として完成させます。途中、口頭発表を何度も行うことでも客観的な視野を蓄えます。作品制作またはアートプロジェクト企画などの実践と論文を組み合わせた学術的に高度でかつ卒業後に即戦力となる成果を目指します。

教育の特色②

芸術が果たす社会的役割の可能性を、創造的な実践と学際的な芸術学で開拓し、美術作家、批評家、キュレーター、研究者としてリーダーシップがとれる人材を育成します。



貝紫染の概要

「貝紫染」とは…

アクギダイ科の貝が持つ

殻から採れる「アコバシ」

という青色液を染料として用いる染色

芸術学専攻

Aesthetics

Art History

1年次 2年次 3年次 4年次

理論と実践両面から芸術学の基礎を学びました。
日本、東洋の美術史から
中心に学び、実践ではデザインから彫刻、工芸など多岐に分野を経験す
ることで藝術に対する知識と理解
を深めました。

1年次に引き続き、理論と実践の両面を学びました。
各自で研究テーマと共に京都や奈良などの寺社、近畿など訪ね、
調査を行う古美術研究旅行を行いました。

各自の専門分野を選び、研究の専門性を深めています。
「良い物せし」と号される調査では、各自が調査を出し、それに
ついて各自が演説研究する会、学内開催の研究会を行いました。

幅広い分野から各自が主体的にテーマを選択し、研究報告の指導もと研究論文の執筆、そして研究成員の発表を行います。

絵画、工芸、写真、現代美術、色彩、土着信仰など、さまざまなジャンルや時代、地域を取り扱った卒業論文は、金沢美術工芸大学芸術学専攻が学生の幅広い関心に対応してくれる場所であることを改めて示すものとなったのではないかと思います。

最後になりますが、この度は、令和2年度金沢美術工芸大学卒業制作展にお越しいただきありがとうございます。皆様に私たちの4年間の成果をご高覧いただければ幸いです。

芸術学専攻 4年生一同



卒業制作展 展示の様子

ごあいさつ

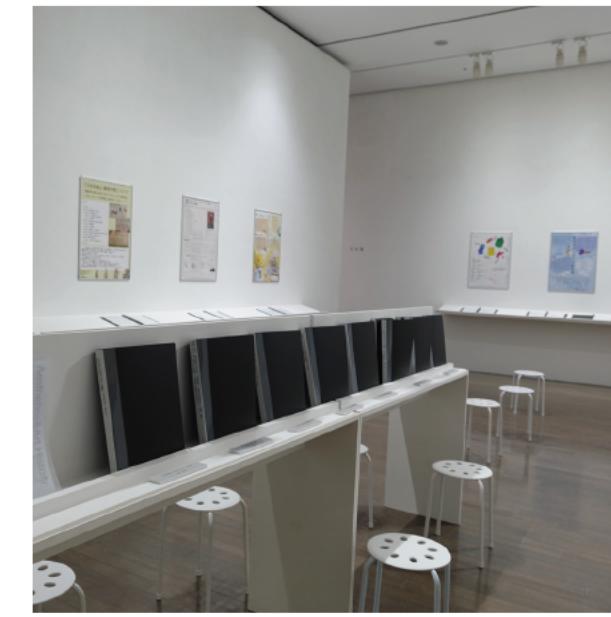
ここからは芸術学専攻4年生による卒業論文の展示になります。芸術学専攻では、4年間の成果を作品制作という形ではなく、卒業論文の執筆という形で発表しています。今回の卒業制作展では、それぞれの論文及び論文の解説パネルを展示します。

芸術学専攻の学生は、3年生の冬頃にテーマを決定してから、約1年間かけて卒業研究を行います。今年度は新型コロナウィルスの流行もあり、思うように研究を進められないもどかしさを感じながらの論文執筆となりました。しかしながら、多くの方々のご協力のおかげで、16名が論文を書き上げ、卒業制作展を迎えることができました。

絵画、工芸、写真、現代美術、色彩、土着信仰など、さまざまなジャンルや時代、地域を取り扱った卒業論文は、金沢美術工芸大学芸術学専攻が学生の幅広い関心に対応してくれる場所であることを改めて示すものとなったのではないかと思います。

最後になりますが、この度は、令和2年度金沢美術工芸大学卒業制作展にお越しいただきありがとうございます。皆様に私たちの4年間の成果をご高覧いただければ幸いです。

芸術学専攻 4年生一同



卒業制作

江戸時代の図像資料に描かれた根付の研究

金沢美術工芸大学 芸術学専攻 4年 1718005 後藤葵

第一章 根付の概要
第一節 現存する根付の特徴
第二節 圖像資料から見る根付の変遷
第三節 根付描写についての補足

第二章 圖像資料から見る根付の変遷
第一節 圖像資料から見る根付の変遷
第二節 圖像資料から見る根付の変遷
第三節 圖像資料から見る根付の変遷

第三章 圖像資料から見る根付の変遷
第一節 圖像資料から見る根付の変遷
第二節 圖像資料から見る根付の変遷
第三節 圖像資料から見る根付の変遷

おわりに

根付とは印籠や巾着、煙草入れなどを帶に提げるために使用したものである。起源は定かではないが、江戸時代に広く使われていた。本研究は現存する根付ではなく、図像資料（浮世絵や版本の挿絵）に描かれた根付に着目して研究を行っている。実際に根付が用いられていた時代に描かれているからこそ、描かれた根付からは江戸時代の根付について掘り下げる研究を行えると考えられるためである。

研究の流れとしては根付の概要をまとめ、図像資料に描かれた根付の分析を行った上で現存する根付との比較を通して、根付に根付について考査している。最終的には、根付研究における図像資料の重要性を明らかにすることが目的である。

画像（上）『萬葉女丹記』（1822年）（下）『宿部鳴見鏡』（1831年）ともに国立国会図書館デジタルコレクションより加工して引用

ポストコロニアル・フェミニズムから見る〈日本美術史〉—日本軍「慰安婦」問題をケース・スタディとして

金沢美術工芸大学 芸術学専攻4年 1618007 漢水渓

Introduction 〈美術史〉の現在地—権力によるアートの支配
I 行先研究
-1 ポストコロニアルズム
-2 〈日本美術史〉におけるジェンダー・フェミニズム
-3 日本軍「慰安婦」問題
II 日本軍「慰安婦」問題と〈日本美術史〉
-1 History=His-story—富山妙子《ガルガンの祭りの夜》(1984)
-2 His-storyからHer-storyへ—猪田美子《慰安の宴》(1993)
イトー・タリー《あなたを忘れない》(2006)
-3 Her-storyからMy-storyへ—確井ゆい《空(から)の名前》(2013)
-4 Our-storyに向かって
III あいちトリエンナーレ2019《平和の少女像》の展示拒否問題
Conclusion 今後の課題、展望